

彼女はいつも僕らといっしょに寝^{やす}むことにしていた。僕らの真ん中で、弟のムスタファーと妹のラビアーのあいだで。

彼女はあつというまに眠ってしまうので、その寝息は夜な夜なごく自然に、ほとんどハーモニーをなして、眠りのリズムを刻むのだった。はじめは、それが僕らにはうっとおしくて、夢のなかへと静かに入っていく妨げになっていた。時が経つにつれ、彼女の夜の音楽は、つまりは雑音なのだけれど、歓待の吐息となって、僕らの夜に伴走し、悪夢が僕らを捕らえてへとへとになるまで離してくれない時に、僕らを安心させてくれることもあったのだ。

長いこと、サレのハイイ・サラームにある僕らの家は、三部屋の一階しかなかった。ひとつは父の、もうひとつは兄アブデルケビールので、最後のひとつが僕ら、残りの家族の部屋だった。つまり、六人

の姉妹とムスタファー、母と僕だ。この部屋にはベッドはなくて、長椅子がたったの三つ、昼は客間のソファアの役割を果たすのだった。僕らはいつだつてこの部屋にいて、そこには古い巨大な、お化けみたいなタンクスもあつて、折り重なるように暮らしていた。ここで食事をし、ときにはここでメントテイも淹れたし、授業の復習もすれば、お隣のおばさんたちを招き入れたり、延々とおしゃべりをしたり、そしてもちろん、けんかもした。大人しいのも派手なやつも。それは日によりけりだったし、精神状態や、とりわけ母さんの様子次第だった。

何年ものあいだ、子ども時代、青春時代を通じて、僕は人生の大事な部分をこの通りに面した部屋で過ごしたのだ。四方の壁は外の喧騒をたいして防いではくれなかったが、その下で暮らした小さな屋根は、その記憶のなか、その皮膚のなかに、僕らの人生を形作っているものを記録し、そこで僕らはすべてを体験し、すべてを感じ、のちにはすべてを思い起こすのだった。

ほかの二つの部屋に僕らは入ることがほほできなかつた。とりわけアブデルケビールの部屋には。彼は長男で、ほとんど一家の王だった。父の部屋は特別な機会にはサロンとなり、素晴らしく装丁されたアラビア語の本を丁寧に並べた図書室、そして彼の愛の巣だった。両親が愛を交わすのもそこだった。それは少なくとも週に一回は彼らに訪れるのだった。僕らはそれを知っていた。家のなかでのことはみんな何でも知っているものだった。

母に性的欲求を伝えるために、父は独特の技法、戦略を編み出していた。そのうちの一つは、ただ単に僕らの部屋でいっしょに夕べを過ごすことだった。大の話好きだった父が、何にでもコメントするの

が好きだった父が、突然だんまりを決めこむのだ。彼はもう何も言わなくなり、一言も、何の音も口から洩れなくなる。タバコさえ吸わなくなるのだ。部屋の隅に身を縮めて、独りで欲望の苦悶に堪えながら、性行為の発端に、すでに愉悦にあつて、自分の身体を抱きしめているのだった。彼の沈黙は雄弁で、重苦しく、何ものもそれを打ち破ることはできなかった。

母はすぐに理解したし、僕らも同様だった。

彼女が無言の提案を受け入れると、今度は彼女が村の話やけたたましい笑い声で夕べを賑やかにする番だった。疲れていたり怒っていたりする時は、彼女もまた押し黙った。その拒絶は明らかかなもので、父もそういう時は食い下がらなかった。でも一度だけ、腹を立てた父が、母に、そして同じ機会に僕らにしつぺ返しをしようとして（彼らの性的な話に僕らは完全に中立だったのに、少なくともそうであろうとしたのに）、家じゅうの電気を切ってしまったことがある。こうして彼は、残酷にも、毎週夕方に夢中になって見ていた国際放送のバラエティ番組を僕らから取り上げた。僕らを自分と同じ欲求不満の状態においたのだ。誰も抗弁しなかった。僕らはよく理解していたのだ。彼に喜びがなければ、僕らにも喜びはないってことを。

父のサロン部屋に行くのに、ムバルカはみんなが眠ってしまうのを待っていた。それから彼女は僕らを置いて、安心して、妻の務めを果たしに、夫を幸せにしに向かうのだった。僕はこの魔法の時間、暗闇のなかで愛に向かう旅立ちに立ち会おうとして、なんども眠らずにしようと試みたことがある。結果は失敗。あの頃は、僕は眠るのになんの問題もなかったから、ベッドに入るや僕の奥底の暗闇はほとん

ど即座に映画のスクリーンに変わるのだった。これが母の贈り物だった。

愛の夜のあいだ、僕らに添い寝して、子守唄となり、僕らを愛してくれる母の寝息はもはやそこになかった。翌朝、目覚めは辛かった、なにかが僕らに欠けていたのだ。でもムバルカはすでに僕らのところに、ラビアーとムスタファーのあいだの自分の場所に戻っていた。

その夜、僕の夢は性的なものではなかった。そのかわり、日によっては、僕の想像力はいともしやすく、ある種の興奮を伴って、燃えるような、いささかインセスト的な地へと冒険に出るのだった。僕は両親といっしょにベッドにいた。父は母のなかにいた。硬くて大きい父の性器は（それは大きなものでしかありえなかった！）、母の巨大なヴァギナを貫いている。僕には彼らの声が、吐息が聞こえていた。始めは、僕にはなにも見えなかった。すべては真っ暗だったけど、最後には僕は彼らの隣にいて、近くから、自分がよく知っていると同時にそれほどよくは知らない二つの身体を見つめていて、手助けする用意も万端、彼らとともに興奮して、幸せで、息を切らしていた。モハメドはすぐさまムバルカに襲いかかるものだったし、ときには服を脱がせもしなかった。彼らの性的結合は長いあいだ、とても長いあいだつづいた。彼らは言葉を発することはなかったが、眼を閉じたままお互いを与えあっていた。完璧な性的ハーモニーが自然に成就していた。彼らはお互いのために創られていたし、明らかに、セックスは彼らが作りなしている夫婦の姿をはっきりと表現するための特別なことばだった。九人の子どもを産んだ後でさえ、彼らのお互いへの欲望はまったく変わりがなく、神秘的で楽しげで無垢のままだったのだ。